

国境超え語らい、究めた数学

科学 & 医療

「数学のノーベル賞」とも呼ばれる国際数学賞「アーベル賞」の授賞式が20日、ノルウェーで開かれた。日本人初の受賞者として出席した京都大数理解析研究所の柏原正樹・特任教授は、半世紀以上、数学の研究を続けている。孤高の研究者と思いきや、多くの人に支えられた研究人生でもあるようだ。(村上和史)

京都大特任教授

柏原 正樹さん 78



仲間を支えられた半世紀

佐藤さんを追ひ、197

1年に京都大数理解析研究所で助手になった。その後、佐藤さんと一緒にフランスに1年間留学。この時経験した海外研究者との交流が、後の研究に大きく役立った。

仏留学きっかけ

当時、柏原さん(門下生)は講演や講義の内容をノートに残していた。「過去のノートを読み返すと、研究の根拠となる重要なコメントがいくつも残っており、驚かされた」と明かす。

1年に京都大数理解析研究所で助手になった。その後、佐藤さんと一緒にフランスに1年間留学。この時経験した海外研究者との交流が、後の研究に大きく役立った。

論文に、共同研究が始まったことある」と対面で話す。講演などで海外に行くこと、1週間ほど滞在して研究者と語り合う。インドでは南インドの音楽に魅了され、たびたび現地のコンサートに足を運んだという。

一人では数学の理論を突き詰める研究者が多い中、これまで50人以上と共同研究を進めてきた。オンライン会議が普及した今も、「やっぱり会って話すのが一番」と笑う。

「短期間の利益だけでなく、研究を軽んじてはいけない。数学も科学も力を合わせて進んでいかないと発展しない」と力を込める。長年研究者同士の交流を深めてきたからこそ、国境を超えた協力の必要性を感じている。



南インドの音楽も好きで、スマートフォンなどで聴く

(本人提供)



「研究者仲間とのリアルな語らいが大切。発想の源泉になる」



アーベル賞の授賞式でノルウェー国王ハラルド5世(右)から祝賀される
©Thomas Brun/Abel Prize

共同研究で道を開いてきた

数学と生きた半生

1947年1月

京都府京都市で生まれる。父職の仕事の関係で仙台や熊本、大阪などで過ごした

57年頃

「つるかめ算」を学び、数学の奥深さを知る

60年代

大阪府立豊中高校を卒業し東京大に進学。恩師となる佐藤正樹さんの話を聞き、想像力の大きさに圧倒される

70年代

東大の修士課程を修了後、佐藤さんを追って京都大の助手になる。佐藤さんらとフランスに1年間留学。共同研究のきっかけとなる

2018年

日本発の国際賞「京都賞」を受賞

25年5月20日

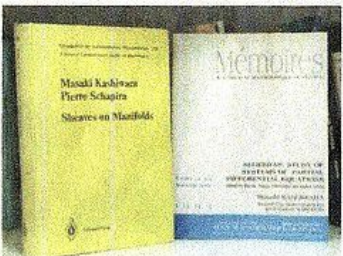
アーベル賞を受賞

これが専門

3大分野つなぐ理論を確立

数学には、数の代わりに「x」などの文字を当てはめて計算などを行う「代数学」と、図形を扱う「幾何学」、微分積分などを用いて関数の性質を理解する「解析学」の3大分野があり、それぞれ独立して探究していくのが一般的だった。

柏原さんは、恩師の佐藤さんが提唱した「代数学解析学」の研究に取り組み、大学院時代にこの学問に必要な「D



書籍化された「D加群」の修士論文(右)や共同研究の書籍